



**Data**

監督・脚本：大島渚

出演：松田英子／藤竜也／中島葵／  
松井康子／殿山泰司／芹明香／阿部マリ子／三星東美／  
藤ひろ子／白石奈緒美／  
青木真知子／東祐里子／安田清美／南黎／堀小美吉／  
岡田京子／松廼家喜久平／  
九重京司／富山加津江／福原ひとみ／野田真吉／小林加奈枝／小山明子

👁️👁️ みどころ

私が検察庁で司法修習をした1972年4月～8月には『一条さゆり 濡れた欲情』事件という“生の題材”に出くわした。また、司法試験の勉強中や弁護士活動の中で出会えた『黒い雪』事件、『四畳半襖の下張り』事件も興味深かったから、本作には興味津々！しかして、その企画は？撮影は？

“本番女優”探しはオーディションで可能だが、“本番男優”探しは大変。日活の若手俳優・藤竜也がそれに抜擢された理由は？彼の覚悟は？当時の日活の看板女優・吉永小百合は、直近の『いのちの停車場』（21年）まで出演122本を誇っているが、藤竜也の現在は？石原裕次郎、渡哲也亡き後、日活や石原軍団を背負うべき逸材だが、彼にとっての本作の功罪は？

「わいせつ、なぜ悪い！」京都府学連の委員長も務めた“稀代の天才”大島渚は敢然とわいせつ裁判に挑み、見事無罪を勝ち取った。それに比べると、新型コロナウイルス対策として飲食店に次々とかけられる“バカみたいな規制”に唯々諾々と従っている今の日本は一体ナニ？敢然と反旗を翻し、裁判闘争に挑むのはグローバルダイニングだけ？大島監督の反骨精神は今いづくに？



■□■大島渚監督1976年の超話題作をやっと今鑑賞！■□■

1967年4月大阪大学法学部入学。1971年10月司法試験合格。1972年4月～74年3月第26期司法修習生。1974年4月大阪弁護士会登録。18歳から25歳までの青春時代をそんな経歴で過ごした私は、検察修習中の1972年4～8月、『一条さゆり 濡れた欲情』事件という“生のわいせつ事件”に取り組んだ。大学時代には、歌手・荒木一郎が主演した大島監督の『日本春歌考』（67年）に興味を持っていたから、「松竹ヌーヴェルヴァーグ」を代表する大島監督の『愛のコリーダ』（76年）が日本で公開され

るとなると、そりゃ必見！

ところが、残念ながら弁護士2年目の私はメチャ忙しいうえ、大阪国際空港公害訴訟の弁護団にも参加していたから、平日は夜11時過ぎの電車で戻るのが日課だったし、土・日・祝日という概念は全くなかったから、映画館に行く時間などどこにもなかった。そのため、本作をはじめ“わいせつ裁判”として有名な、神代辰巳監督の『四畳半襖の裏張り』（73年）も、武智鉄二監督の『黒い雪』（65年）も『白日夢』（81年）も観ていない。そんな私だったから、今頃になって『愛のコリーダ』が4K修復して蘇ったとなると、こりゃ必見！

## ■□■ “本番女優” は発掘可能！しかし、“本番男優” は？ ■□■

大島渚監督がかねてから暖めていた「阿部定事件」の映画化構想を実行に移したのは、1975年にフランスでポルノが全面的に解禁されたことがきっかけらしい。大島監督は1954年に松竹に入社した後、会社の方針とは別に次々と自分の企画を実行していたが、京大法学部の学生運動家として京都府学連委員長を務めたこともある彼は、日本で撮影し、未現像フィルムで税関を通過すれば、刑法175条の猥褻罪に邪魔されずフランスで公然とポストプロダクションを行ってハードコア・ポルノを作ることができると考えたらしい。なるほど、なるほど。

“中国第5世代”を代表するチャン・イーモウ（張藝謀）監督は、『紅いコーリャン（紅高粱）』（87年）（『シネマ5』72頁）、『菊豆』（90年）（『シネマ5』76頁）、『活る（活着）』（94年）（『シネマ5』111頁）等の初期の作品ではコン・リー（鞏俐）を起用し続けてきたが、『あの子を探して（一個都不能少）』（99年）（『シネマ5』188頁）でウェイ・ミンジ（魏敏芝）を、『初恋のきた道』（00年）（『シネマ5』194頁）でチャン・ツイイー（章子怡）を、『至福のとき（幸福時光）』（02年）（『シネマ5』199頁）でドン・ジエ（董潔）を次々に発掘したため、“新人女優探しの名人”と言われるようになった。

大島監督はしばしば「一に素人、二に歌手、三四がなくて五に映画スタア、六七八九がなくて十に新劇俳優」と語り、『戦場のメリークリスマス』（83年）ではデヴィッド・ボウイ、坂本龍一、ビートたけしという“前代未聞のキャスティング”を実現させたが、セックスと愛を極限まで描くことを目指した本作で、主演女優＝本番女優に誰を据えるの？ 京都の大映京都撮影所で外部の人間を一切シャットアウトする中で行われる、本番行為を含む本作の撮影。それを前提としてオーディションで選ばれた新人女優は松田英子だ。コン・リーやチャン・ツイイーほど美人じゃないのが玉にキズ（？）だが、さあ、その演技力は？

他方、本番を含むセックスシーンの撮影で女優以上に大変なのが男優。1980年代以降は家庭用ビデオの普及とともにポルノビデオも各家庭に普及したが、その世界では女優より男優の方が大変な肉体労働だからギャラは高いという説まであった。AV女優はいくらでも集まるが、本番に耐え、撮影に耐える肉体（イチモツ）を持った男優の募集が大変な

のは当然だ。本作では、日活から藤竜也が起用されたが、その内幕は？

## ■□■ “阿部定事件” の内容と顛末は？時代背景は？■□■

日経新聞に渡辺淳一の『失樂園』が連載されたのは、1995年9月～96年10月。私は毎朝これを楽しみに読んでいたから、「阿部定事件」は同作の主人公・久木祥一郎の講義(?)で詳しく知ることができた。それは、久木と不倫関係にあった凛子も同様だが、小説ではこの2人は思わぬ心中死体で発見されることになるので、それに注目！ちなみに、役所広司と黒木瞳が共演した森田芳光監督の『失樂園』(97年)は、小説とともに日本中に“失樂園現象”を起し、興行収入40億円の大ヒットを記録した。

阿部定が情夫を殺害した後、その局部を切り取ったのは1936年(昭和11年)5月18日。その後、大切に保管していた“それ”と共に逮捕されたのは同月20日だ。日清・日露戦争に勝利し、西欧列強と対等に渡り合っていた日本は、1931年の満州事変から太平洋戦争へと突き進んでいったが、「坂の上の雲」に向かっていた日本が15年間かけて「奈落の底」に転落していく最大の契機になったのが、1931年の「二・二六事件」だ。“昭和維新”を旗印にした青年将校たちの決起は一体何だったの？それは、五社英雄監督の『226』(89年)(『シネマ47』257頁)でも、更に『NHK特集 二・二六事件』でも詳しく描かれているので、本作の時代背景として「二・二六事件」はしっかり勉強したい。

本作冒頭は、1931年2月1日に東京中野の料亭、吉田屋に阿部定(松田英子)という名の女が住み込み女中として雇われるシークエンスから始まる。定は堅気の仕事として女中を選んだそうだが、元々は遊郭の女。そのことが老乞食(殿山泰司)との出会いでバレてしまったが、定の持つ独特の色香に魅かれたのが主人の吉蔵(藤竜也)だ。吉蔵は40歳過ぎの男盛りで粋な男だったから、定の方も彼にひとめぼれ。以降、スクリーン上には「芸術か、ワイセツか?」、「愛か?欲か?」をテーマにした映像が流れっぱなし。文字通り、藤竜也と松田英子の体を張った演技に目が奪われていくことになる。

そんな2人が毎日のように体を重ねている間に「二・二六事件」という大事件が起きたわけだが、そんな事件に定はもとより、吉蔵も全く関心がないらしい。あの時代の日本に、吉蔵のような価値観(それが何かは本作では全く描かれないが)の男がいたことにビックリだが、本作では、定の限りない性欲の前に痩せ細り、「このままでは骸骨になって死んでしまう」と言いながら、それでも「この身体はおめえの好きなようにしていいよ」と言う吉蔵の愛(?)に注目したい。それがいったい何だったのかは、昭和史の編纂に従事していた『失樂園』の主人公・久木が詳しく調べているので、そちらに問い合わせてみればいだろう。

## ■□■ 撮影は？ヘア解禁は？ヘア無修正 vs ぼかしは？■□■

本番モノのAVビデオの撮影にラブホテルという“密室”が使われることはよくあるが、本作の撮影は映画界におけるその先陣を切ったもの。その詳細はさまざまところで紹介

されているが、そんな撮影は男優が大変。とりわけ、その肉体状態の維持が大変だ。中国語は外来語を使うについても漢字を当てているが、日本人は器用だから、外来語はうまくカタカナに転換するとともに、さまざまな和製英語も作り出している。「ヘアヌード」はそんな和製英語の1つだが、それって一体ナニ？

それは Wikipedia によると「陰毛が修正されずに写っているヌード写真・映像」のことだ。日本ではかつて修正が義務付けられるなどの規制があったが、1990年代初めに事実上の解禁状態となり、一大ブームを巻き起こした。なお、諸外国では陰毛の露出の有無が猥褻の判断基準ではなかったため、ヘア解禁は日本でのみ意味を持つ概念だから、要注意だ。日本では、1991年1月の篠山紀信撮影の樋口可南子写真集『water fruit 不測の事態』が事実上の日本の出版・映像業界における「ヘア解禁」となり、以後続々と出版されるヘアヌードブームの先鞭をつけることとなった。

他方、“密室”で行われた本作の撮影は文字通りの“本番撮影”だが、それをスクリーン上で上映するについて、日本では“ぼかし”がかけられている。それに対して、フランスでは『愛人（ラマン） 無修正版』（29年）、『エマニエル夫人 無修正版』（74年）、『エマニエル ヘア解禁版』（84年）、『美しき諍い女 無修正版』（91年）等が“ヘア解禁版”、“無修正版”として上映されているから、ここでも日仏の文化レベルの差異（？）が明らかだ。この“ぼかし”を巡っては、映画界と映倫との間の長い戦いがあるが、それは省略。しかして、本作は？

## ■□■芸術？それともワイセツ？「ワイセツ、何が悪い！」■□■

日本の刑法175条第1項は、「わいせつな文書、図画、電磁的記録に係る記録媒体その他の物を頒布し、又は公然と陳列した者は、2年以下の懲役若しくは250万円以下の罰金若しくは科料に処し、又は懲役及び罰金を併科する。」としている。しかして、本作の写真や脚本などを掲載した同名の単行本の一部がわいせつ文書図画に当たるとして、著者である大島監督と出版者の社長が起訴された。

しかし、一審の東京地裁（昭和54年10月19日）も二審の東京高裁（昭和57年6月8日）も無罪。これが『黒い雪』事件、『一条さゆり 濡れた欲情』事件、『四畳半襖の下張』事件と並んで有名な『愛のコリーダ』事件だ。本作を観た上で、この一審、二審判決を改めて読み直してみると、その説得力がよくわかる。『愛のコリーダ』事件判決は、わいせつ性の具体的判断基準は『四畳半襖の下張』事件と同様とした上で、対象物を具体的に判断してわいせつ性を否定している。今から40年前の1970年～80年（昭和50年代）はそんな時代だったのだと再確認できたことに感謝！

ちなみに、『戦場のメリークリスマス』と『愛のコリーダ』のデジタル版上映を記念して作られたパンフレットには、大島監督の息子でドキュメンタリー監督の大島新と、坂本龍一の娘でミュージシャンの坂本美雨の対談がある。これを読むと、改めて私たちの時代から息子たちの時代が変わったことを再確認！

2021（令和3）年6月25日記